

Title	ヒュースケンのことゝも
Sub Title	H. Heusken in Japan
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.2/3 (1963. 9) ,p.1(113)- 20(132)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本稿は日普通文史の研究の一齣であつて、この両国の条約締結について尽力した一外人の生涯について記するものである。言はば初期日普交渉外史ともみられるものである。ヒュースケンは日米、日普の交渉に通訳として活躍した好青年である。私は早くから彼の生涯について同情を禁じ得ないものがあつた。故国に年老いた母を残して、年若くして外国に横死したこの青年の心情を思うと、誠に気毒に堪えないものがある。田辺太一氏は「ヒュースケン被殺」について、次のように記している。「普魯士条約の談判は、芝赤羽根接遇所(此時外賓接遇の為新に一館を設け、接遇所という)に於てせり、使節オイレンブルク侯は、其従士の内、荷蘭語を能するものなきを以て、亜米利加公使館の通弁官ヒュースケンを頼み、其通弁にあたらしめたり、これその語をよくするのみならず、下田已未我国にありて、よく事情に通じたるを以てなり、然るに十二月五日の夕方、古川ばたにて何人とも知らず、これが腹部に刃を刺して死にいたし退去たるものあり、...ヒュースケンは、性灑脱の人物なれば、かの護衛の附添ことを嫌いて、兎角に独歩を試むるの癖ありき、当日は彼接遇所にて、普魯士使節談判の通弁をなし了りて、己が宿所、即麻布善福寺に帰らんとせし途中なりき、是に於て、外交の局に当るものは、その犯人の搜索に手をつくしたれども、竟にこれを蹤迹し得ず、云々」、(幕末外交談一五一、二頁、なお福地源一郎著懐往事談「ヒューケン氏の暗殺掘織部正の自殺」参照)この簡単な記述の中にも、彼の幕末外交に於ける活躍とその性格とがうかがわれるのである。自分は次に主としてプロシャ側の史料によつて、ヒュースケンの生涯とその最後の事情を記してみようと思う。</p>
Notes	松本芳夫先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ヒュースケンのことづも

今 宮 新

本稿は日普通交史の研究の一齣であつて、この両国の条約締結について尽力した一外人の生涯について記するものである。言はば初期日普交渉外史ともみられるものである。ヒュースケンは日米、日普の交渉に通訳として活躍した好青年である。私は早くから彼の生涯について同情を禁じ得ないものがあつた。故国に年老いた母を残して、年若くして外国に横死したこの青年の心情を思うと、誠に気毒に堪えないものがある。田辺太一氏は「ヒュースケン被殺」について、次のように記している。「普魯士条約の談判は、芝赤羽根接遇所（此時外賓接遇の為新一館を設け、接遇所という）に於てせり、使節オイレンブルク侯は、其従士の内、荷蘭語を能するものなきを以て、亜米利加公使館の通弁官ヒュースケンを頼み、其通弁にあたらしめたり、これその語をよくするのみならず、下田已来我国にありて、よく事情に通じたるを以てなり、然るに十二月五日の夕方、古川ばたにて何人とも知らず、これが腹部に刃を刺して死にいたし逃去たるものあり、……ヒュースケンは、性灑脱の人物なれば、かの護衛の附添ことを嫌いて、兎角に独歩を試むるの癖ありき、当日は彼接遇所にて、普魯士使節談判の通弁をなしたりて、己が宿所、即麻布善福寺に帰らんとせし途中なりき、是に於て、外交の局に当るものは、その犯人の搜索に手をつくしたれども、竟にこれを蹤迹し得ず、云々」（幕末外交談一五一、二頁、なお福地源一郎著懷往事談「ヒュースケンの暗殺掘織部正の自殺」参照）この簡単な記述の中にも、彼の幕末外交に於ける活躍とその性格とがうかがわれるのである。自分は次に主としてプロシヤ側の史料によつて、ヒュースケンの生涯とその最後の事情を記してみようと思う。

一八六一年一月十六日(万延元年十二月六日)付のオイレンブルグよりプロシヤ外務大臣シュライニッツ宛の報告書を見ると、次の如きことが記されている。

「小官は閣下に昨夜起つたいたましい事件を御報告申し上げねばなりません。この事件によつて、吾々の信頼すべき友人であり、また親しい仲間が失われてしまつたのであります。アメリカ使節の秘書兼通訳で二十八才の若人ヒュースケン君は、吾々の江戸到着と同時に、アメリカ公使より派遣されて、吾々を助けてくれたのであります。彼の日本に関する知識と日本人との交際は、吾々に大変な助力となり、彼の性格の善良さは、すぐ人々に感ぜられ、吾々の愛すべき仲間となつたのであります。いつものように昨晚も吾々と食事を共にし、八時半頃馬に乗つて帰路につきました。三人の役人が付添い、一人は提燈を持つて先に立ち、二人は後につき、また別に別当が付添つて行きました。十時頃私は、アメリカ公使館から、ヒュースケンが重傷を受けて家に運ばれているから、至急医者が必要とするという報告を受けたのであります。直ちに医者ルシウス及び他の人々が大急ぎで出発しましたが、ヒュースケンは重態でありました。鋭い刃傷と突き傷で、下腹部が切られ、内臓が飛び出して居り、腕や胸にも傷を受けており、出血多量のため殆んど力を失つて居りました。彼のようやく説明するところによると、吾々の宿所より二三百歩位行つた広場で、七人の武士に襲われ、役人の提燈はたたき落され、別当は投げとばされて傷つけられた。彼はすこし走つてから落馬した。彼の言うところによると、役人が戸板を取つて来る間、約半時間道路にそのまゝ放置されていたのである。ルシウス博士はあらゆる手当をしたが、腸が露出してしまつていて極めて重態であつた。然し彼の死が予想以上に早く来るとは思はなかつた。ヒュースケンは十二時に死去したのである。今朝私はアメリカ代理公使ハリス氏を訪問したが、彼は深い悲しみに沈んでいた。ヒュースケンは五年以来下田や江戸に於いて、彼の唯一の信頼すべき部下であつたのである。彼の死はハリス

氏にとつては、かけがない損失である。ハリス氏は悲しんでいたけれども、次のように言つていた。この事件の責任は日本政府にはない。寧ろ自分は彼に、江戸を夜中騎行することが非常に危険であるということをも、早くから警告すべきであつて、彼に危険な騎行をやめるよう誓はせるべきであつた。この殺人には明らかに政治的動機があると思われ。一体外人に対する殺傷事件が、浪人達の陰謀によるものか、大名や武士と何等かの関係があるか、或は盜賊の類か、いたずらに流血を好む一部の市民の行為かは、明瞭でないが、政府がそれに関係しているとは絶対に考えられない。たとえ犯人が逮捕されなくとも、政府がこれに関知しているとも思われず、また黙認しているとも考えられない。また他の人々の噂によると、数ヶ月以前より、外国人に敵意をいだいている一派が、ヒュースケン氏の殺害を計画していたと言う。即ちそれはヒュースケンが、条約締結を目的として日本を訪問する外国人達を、常に助けているという理由によるものである。兎に角この事件によつて、外国人の生命が危険にさらされていることが明瞭になつたので、早速これに対する処置が考慮されなければならないと思う。」

以上がその報告の大要である。プロシヤ使節オイレンブルグ個人の手紙をあつめた *Ost-Asien (1860-62 in Briefen der Grafen Fritze zu Eulenburg.)* またはハイネ、シュピース、クライヘル、ブランド等の著書及び「プロシヤ東アジア遠征記」にも、これと殆んど同様な記事があるのである。自分は嘗て、それらの記事を見て、年若くして異境に非業の死を遂げた一外人の生涯に、同情を禁じ得なかつたのである。

ヒュースケン (*Hendrik Heusken*) の生涯の詳細のことについては、殆んど分らないのである。彼には日記があるが、これは日本滞在中の概略しか見ることが出来ず、またハリスの日記 (*The Complete Journal of Townsend Harris.* 坂田精一訳ハリス日本滞在記三冊) にも所々出て来るのであるが、その生涯を示す記事はない。プロシヤ政府で編纂したプロ

シャ東アジヤ遠征記四卷 (Die Preussische Expedition nach Ost-Asien 4 Bde.) の中の一・二巻にも、彼に関する記事があるが、十分のものとは言えないのである。兎に角これらのものによつて、その生涯の大略を記してみる。

ヒュースケンは一八三二年一月二十日アムステルダムに生れたのである。彼の家は家格も良く財産もあつたので、青年時代は極めて幸福な生活を送つたのであつた。然し何かの事件によつて、急に父がその財産を失うことになり、しかも間もなく死亡するという不幸に見舞われて、彼は早くも人生の苦痛を味うことゝなつたのである。何才頃であるか分らないが、恐らく二十才前後の彼は、アメリカに生活の活路を求めて渡つたのである。然しアメリカの生活も苦勞に満ちていたものゝようであつた。この時彼は日本へ領事として赴任しようとしていたハリスに見いだされたのである。彼がハリスの個人秘書として採用された理由は、彼に語学の才能があつた為であると思われる。彼の母国語であるオランダ語が、当時日本に於ける外交語であつたことは、その採用の第一の理由であるが、彼はそれ以外に仏語をよくしたらしく、彼の日記の独文の抄訳者ヴァグナー博士 (Dr. G. Wagener) の記する所によれば、彼の日記は仏語で書かれたものであつた。また独語に達者であつたことは、オイレンブルグの江戸に到着した翌日、即ち一八六〇年九月五日の手紙の一節に、「朝七時にアメリカ代理公使タウンセンド・ハリス氏は、その通訳ヒュースケン氏を私の許に遣はして、私の江戸滞在中、彼を自由に使用してくれという実に親切な書翰をよこした。このヒュースケン氏については、彼が非常に伶俐で信頼の出来る人であることを以前に聞いたことがある。彼がまた独乙語に堪能であることを発見した時の喜びは格別であつた。ハリス氏の申出を非常に喜んで受諾したことは勿論である。」 (Ost-Asien, S. 64.) とあるのを以てても明白である。彼は勿論英語も出来たのであるが、「その英語は完全のものではなかつたが、これから先、日本へ行つてからの役に立たせるつもりで、タウゼント・ハリスが秘書として備つてきたものであつた。」また彼は、「tea (茶) とい

う言葉を、前から *thea* と綴っていたが、……彼のフランス語の知識のために混合したのである。」という記事が、ハリスの日記のコセンザ氏の註 (*The Complete Journal of T. Harris, P. 110~111, N. 125, 127.*) にみえている所をみれば、或は他の外国語よりも英語は劣っていたのかも知れない。

さて一八五六年一月ハリスより合衆国の國務長官マーシーに宛てた書翰によると、ヒュースケンをハリスに推薦した人は、ニューヨークの牧師デ・ウィット (*De Witt*) 及び他の人々であるという。ハリスは熱心なキリスト教徒であるので、オランダ出身の牧師と親しかつたものと思われる。この関係でハリスとヒュースケンが結ばれたと当然想像される。この時の契約は年俸千五百ドル、日本までの渡航費は無料、船中の食事費は自弁、但しハリスは彼に七百五十ドル前払いしたようである。苦勞していた若いヒュースケンにとつては、誠にめぐまれたものというべきであろう。 (*The Complete Journal of T. Harris, P. 50, N. 51.* 参照) かくてヒュースケンは一八五五年十月二十五日に、サン・ジャシント号 (*San Jacinto*) に搭乗してニューヨークを出発したのであるが、同船にはタイ国王及び日本皇帝への多くの贈物が積込まれていたのである。 (*Ibid., P. 28, N. 18.* 参照) 一方ハリスは彼より早く出発して、欧州を廻り、途中ペナンで同船に乗りこんだのである。兩人を乗せたサン・ジャシント号は約十ヶ月後、一八五六年八月二十一日 (安政三年七月二十一日) 下田に入港したのである。日本に於ける二人の孤独の生活が、かくて始まるのである。

ヒュースケンがハリスと共に日本に居た期間は、四年五ヶ月であつて、この間、一年三ヶ月ばかりは下田で、あとは大体江戸に居たとみてよい。この期間中、彼はハリスの片腕となつて日米条約の談判に活躍して、その手腕を發揮し、ハリスの信頼を得たばかりでなく、日英条約の締結にも尽力し、また特に日普条約の締結に際しては、彼の助力が極めて大であつたのである。四年以上も全く未知な外国で、殆んど二人だけで生活をしていたハリス、ヒュースケンの二人

は、五十才代と二十才代で、親子のような親密さになつたらしく、一八五八年三月ハリスが重病にかゝつて下田に帰り、医者よりも見離される状態となつた時、ヒュースケンは約一ヶ月間にわたつて、殆んど徹夜で看病したのであつた。またヒュースケンの殺された時のハリスは、一人息子を失つたような落胆さであつたという。

ヒュースケンの外交上の功績については、ハリス日記等によつて知り得るのであるが、彼はハリスの全信頼を得て、彼の助力と影響力が大きくなり、その地位が確立して行つたのである。生活も豊かであり、アムステルダムの年老いた母にも十分な仕送りが出来たのであつて、未来への希望で輝いていたのである。彼の日記を抄訳したヴァグナー博士も、「彼の青春の若々しい気分をみると、以前の困窮の苦勞や頑迷さの跡形もなかつた。総ての人々に対する好意、寛容さと正義愛、明朗さと断呼たる確信とは、彼の報告からも汲み取れる。只一度、異国の総ての医術からみはなされて死に直面している長官の病床の横で、何週間も、倦まざる忠実さで看病した時に、心配に打ちまかされたゞけである。」と記している。(G. Wagener, Aus dem Tagebuche Hendrik Heusken's, S. 376.) プロシャ遠征隊の人々も彼と知り合つて非常に仲良しとなつたのであつて、活気のある生活ぶりや陽気な気質や何人も引きつける愛嬌などによつて、連中の人気者となつたようである。使節団の一人は次のように述べている。「ヒュースケン氏は元来オランダ人であるが、当時アメリカの総領事ハリス氏と共に日本へ渡来し、三年前より東アジアのこの使節の旅行中には、常に一緒であつた。彼は衆知のように、オランダ語で仲介される日本当局との交渉の通訳として活動すると同時に、アメリカ公使館の秘書官でもあつた。心から彼は私達の味方となつていた。しかも彼の愛すべき朗らかな気性と、飽くことを知らない好意とは、出来るだけ私達の滞在を愉快ならしめたので、間もなく皆のものから好意を以て迎えられるようになった。江戸市中や其の周囲の各地点へ殆んど毎晩散策が行われたが、彼はその案内役をつとめた。かくて彼は私達の日常生活と離れること

の出来ない関係をもつようになったので、もし一日一回でも彼の姿を赤羽根に見受けない時は、心淋しく感ぜられたのである。」(G. Spiess, Die Preuss. Expedition nach Ost-Asien, S. 207.)

当時の外交団の中で、我国の国内情勢を最もよく理解していた者は、ハリスである。従つて常に彼と共に交渉にあつたヒュースケンも、彼と同様に日本の国情に精通した一人であつた。即ちこの二人は幕府との多くの交渉の結果、当時の日本では、鎖国が維持出来ないということを認識している唯一の存在は幕府であつたが、朝廷と大名との関係から生ずる種々の問題に苦しめられている状態も、かなりよく理解していたようである。たとえばヒュースケンの日記をみると、京都大阪の開港問題や外人の国内居住及び旅行等についての交渉の場合に、日本側の説明を聞いて、日本には藩があつて日本人の旅行さえ自由でない有様であるから、外人の居住や自由な旅行は、種々の混乱を引き起す原因となることも、或点まで理解したようである。「ヒュースケンは、日本側委員の談話の内容をよく理解すると、それが全く正しいものと認めざるを得なかつた。ハリスもまたその談話が真実性を有しており、『そして最も多くの点で自分の意見と一致している』ことを認めた。そして彼は二・三の人々の金もうけの道を作るためではなく、日本を平和的に諸国に開国するために派遣されたのであるということを、一生懸命に日本側に説明した。『貿易は力の源泉である』ということは、イギリスやオランダが証明している。スペインやポルトガルが強国の地位から没落したのは、貿易に努めなかつたためである。日本はその恵まれた地位によつて、まさにアジアのイギリスになり得るのである。というようなことを説いた。彼は内地旅行の問題を、もう一度考えてほしいと要請して話を結んだ。——日本委員はハリス氏の談話の内容を更に考慮するであろう。然し内地旅行について、これ以上熟考することは不必要である。というのは不可能なことを詮議しても無意味だからである。——幕府を全能のものともなし、その欲する所は何事でも為し得ると信じていたハリスの観察

は、幕府が古い規則と慣習とに則して行動している限りに於いては、確かであつた。」(Aus dem Tagebuche H. Heu-sken's, S. 385-6.) このヒュースケンの日記の一節からでも、その大略が察せられると思う。なほ彼の日記から参考のため一八五八年二月二十日(安政五年一月七日)の記事を次に引用してみよう。「この日、M(通訳森山と推測される)がヒュースケン氏に日本に関する色々興味ある事件について語つた。次のような事である。即ち加賀の殿様が憤怒のあまり氣狂いのようになり、『このような事(通商条約の調印)に同意するよりは、寧ろ戦争をした方がよい。』と言つたという。――大君が合理的に支配している間は、大名達も従順であるが、今日のようになると彼等は、『我々は貴方の臣下ではない、我々は貴方の友人である。』と言う。傲慢な加賀の大名は、他の臣下を除いて一万人の武士を有している。三百名の小名達はそれ程恐るべきものではなくて、戦争の際には、彼等をして大名を封じ込めるのである。日本には一種の迷信がある。即ち重要な問題に迷つた時には、二つの文字を二枚の紙に書き、その何れをとるべきかを問うために、『それを神(ミカド)に委ねる』。天皇が紙を開いて、その指示に従うというのである。そのために幕府は、閣僚の一人を天皇の同意を求めするために、京都に送ることに決心したのである。――『然しもし天皇が幕府の意志と対立した時にはどうなるか、とヒュースケンは尋ねている。』通訳は答える。あゝ、我々には種々の方法がある。たとえば公家達に金を与える。この場合大君は大金がかかる。だがこの条約は日本の最善のためであり、それを調印するのが、彼の意向であると決心している。幕府は大名達を幕府の意向に従わせるために困つてゐる。閣僚の長官である備中守は、最も多くの努力をしている。もし彼や彼の同僚達が、何か悪いことや、成就しないことをするならば、彼等はみな切腹しなければならぬ。然し一方、条約が調印されたならば、暴動が勃発し条約の実施は不可能となる。そうなつたらどうなるのか。』(Ibid., S. 387-8.) 以上の記事の事はハリスの日記にも簡単に記されていて、彼はこの、加賀侯の噂について、「私は

これらの事について、日本人が私に話すことには、どうしても全幅の信頼がおけない。私は、彼等が嘘をつくことは当り前のことで、真実を言うのは例外の事と心得ていることを十分に承知している。」と批評している。(The Complete Journal of T. Harris, P. 548-9.) いづれにしろハリス及びヒュースケンの二人は、困難を極めた幾多の外交折渉を通じて、当時の外人の中では、最も日本の政情に通じた外人となつたのであり、またそのために、日本の第一の理解者、同情者ともなつたのである。

さて次に、少しくヒュースケンの日記の事について記してみる。この日記を抄略して照会したヴァグナー博士はその序言に、この日記は、「ヒュースケンの遺稿から、彼の母によつてアムステルダム在住のボーウィー氏に譲渡されたものであり、後に東京在住のドイツ協会長アイクマン氏に托されたのである。フランス語で書かれているこの旅行回想録を通読した際に、これは一八五六年より五八年の間、即ち日本が米、英、露、仏諸国との通商条約締結以前の期間について、たとえ僅かしか新しい重要事項が述べられていなくても、他の出版物よりも、日本の状況と幕府の政策をより正確に知ることが出来ると認めたのである。」と記している。博士はこの日記の抄略を、*Aus dem Tagebuche Hendrik Heusken's (Mitgetheilt von Dr. G. Wagener) と言つて題名を以て、Mittteilg. d. Dt. Ges. f. Natur-u.-Völkerkunde Ostasiens (Bd. III, 1880-84.)* に発表したのである。この稿に使用したものは、この抄略によるものであつて、その本文がいま何処にあるかを知らない。<sup>(註一)</sup>ハリスの日記の編者コセンザ博士(M. F. Cosenza)も、この抄略を用いているのであるが、これは一八八四年正月に英訳されて出版されたことである。コセンザ博士は「日本のアメリカ公使館の第一の秘書官である殉難者ヒューケンの全日記が発見され出版されたことは、日本の初期外交を研究するものにとつては、大変な幸運であり、また大いに元気づけるものである。」と記してゐる。(The Complete Journal of T. Harris, P. 283,

(N. 349.) これが如何なる程度の英訳であるか、自分はまだ英訳本を見る機会がないのである。ヒュースケンの日記は、毎日書かれたものではない。恐らく単調な下田の生活や江戸の生活では、毎日書くほどの刺激もなかつたのかも知れない。外交折渉についても極めて簡単に記しているが、興味を引いたこと、たとえば下田から江戸への旅行などについては、かなり詳しく記している。ハリスの詳しい日記に比べると、非常に簡単なものであるが、それでもこの両者を比較してみることは極めて興味あること、と思う。コセンザ博士は、所々ハリスの記憶違いや書き落としを、ヒュースケン日記で訂正しているようである。ヴァグナー博士によつて照会されたヒュースケンの日記は、一八五六年八月二十一日即ちその下田到着より初まつて、一八五八年六月八日までつゞき、これから約二年半の空白があつて、一八六一年一月一日より再び始つている。ヒュースケンはこの全期間全く日記を書いていなかつたものと思われる。それは一八五八年六月の日記が頁の中程で止まつて、一八六一年の日記は次頁から始つていて、ヴァグナー博士が言つているからである。ハリスの日記も、丁度これと同じように、一八五八年六月九日を以て終つていたのである。この二人が何故に日記を中止したか分らないが、几帳面なハリスに刺激されてヒュースケンは日記を書いたのかも知れない。彼の日記の最後の日付は、一八六一年一月八日であり、暗殺されたのが同十五日夜である。それらから考えてみると、一週間位毎に、その日記を書いたのかも知れないのであつて、彼の気性からも考えられる所である。然しヒュースケンの日記には、ハリスの日記に全く欠けている一八六一年一月一日から八日(万延元年十一月)までの簡単な記事があるのである。次にこれを記してみよう。

一八六一年一月一日、一八六一年の元旦にハリス氏は神奈川のアメリカ領事館に居た。幕府は彼に特別の使者を送つて、次のような事を通知した。多分水戸の人々と思われる五・六百人の浪人が、生活必需品の値上りのために、

外国人に対して何かを企てゝいること、そして彼等は横浜を焼打ちにしようとして企てていることを、幕府は探知したというのである。幕府は彼等が江戸の公使館や神奈川の領事館を襲撃するのではないかと気遣つてゐる。そこで二隻の日本汽船が横浜沖に碇泊するように命令された。そして二人の大名は、横浜の外人を保護するために、すでに六百人を送つた。幕府は神奈川に居る領事達に横浜に行くこと、江戸に居る公使達に城内の邸宅に入つてゐるようによ請した。ハリス氏はこの報告を第一に聞いたので、人々は彼の意見を聞きたいと願つた。然し彼は事態はそう深刻でないと思つたが、他の公使達に報告するために、ヒュースケンを江戸に派遣した。ヒュースケンの留つてゐたプロシヤ使節団は、夕方この公式の報告を受けた。

一月三日、また会談があつて、プロシヤとの条約が締結された。彼の日記は言う、「堀織部守（織部正の間違）は十二月三十一日に死んだ。噂によると切腹したそうである。然し幕府はこれを否定してゐる。」

一月七日、豊後の大名が来て、事態はやゝよくなつたと言ふ。幕府は約六百人の不平分子を発見して、その多くの人々を逮捕した。全部逮捕すると、多くの暴動の起る恐れがあるからである。彼は警護のために更に二・三人の役人をハリスの邸に派遣したいと言つたが、これは拒絶された。この機会にハリスは、彼の邸に居る総ての役人は、彼に対して普通の作法をすることを要求した。——またこの大名は、政治情報に関して、薩摩の大名がもはや再び江戸に來ないという噂は間違であつて、本当は途中まで来て病氣になつて引き返したので、来年は順番でないが、次の年には再び來るであろうと述べた。また多数の大名達が、米を江戸に送らうとしないという噂も、間違であると言ふ。米の輸送は一般に直接ではなく、大阪から商人の仲介によつて行われるからである。——米価をつり上げるために米の買占めをやつた豪商達は、逮捕されて追放され、その財産は没収されたのである。「幕府が財政に困窮

すると、一種の強制借入れを行う。商人達は献金を直接には強制されないが、役人達が何日かは自分の所に来ることを恐れるのである。かくて商人達は自分の財産に応じて、献金するのである。これを御用金と言う。たとえば六年前、上述の商人達は六千枚の小判を差出したのである。」

一月八日、プロシヤとの条約について少しの変更が行われる。そしてヒュースケンは、オイレンブルグ伯が、最後に大君に謁見を要求する文書を役人に手渡しした。

以上でヒュースケンの日記は終つているのである。

ハリスは一八五九年七月（安政六年六月）以来、麻布の善福寺を仮の公使館としていたので、ヒュースケンもその一坊である善行寺を宿舎としていたのである。プロシヤ側の記録によると、善福寺は彼等の赤羽根の宿舎から十分ばかりの所で、道から入ると高い石段があつて本堂に行く、その左側に、奇麗な庭のある小さい建物があつて、こゝがヒュースケンの住所であり、右側の大きな建物が公使の住居であつた。ヒュースケンの部屋は明るくて大変気持ちよく、しかも非常に立派な日本の芸術品で飾られて居たという。彼の召使達は、いづれも満足そうな顔つきをしていて、大変よく気がつくのである。特にヒュースケン付の十二才の少年は、免職官吏の息子であるが、聰明なまなざしでうれい顔をして、両刀を帯び、上級の階級相当の服装をしている。この少年の行儀のよい態度は、外交団の寵児となつていたのである。彼の態度は実に立派で、贈与も冗談も、それをくずすことは出来ない程であつたという。（Die Preuss. Expedition nach Ost-Asien, B. I, S. 271, B. II, S. 145-6. 参照）ヒュースケンは公務の余暇には、よく人々を案内したらしく、オイレンブルグの日記にも時々出て来るのである。散歩をしたり馬に乗つたりすることが、唯一の楽しみであつたらしい。但しハリスに比べて乗馬は下手であつたことは、ハリスの日記に記されている。（The Complete Journal of T. Harris, P. 383. 1

八五七年八月十五日条)然し後には練習によつて、大部上手になつたらしく、方々に遠乗りを試みているのである。またハリスが彼を批評して、「ヒュースケン君は、食べるとき、飲むとき、眠るときだけを知つていて、—他の事はあまり気にかけない人だと思う。」(ibid., P. 284-5. 一八五六年十二月三日条)と記しているように、極めて朗らかで、呑気なところがあつたらしい。従つて、日本政府やハリスの注意を無視して、武装せずに方々に出かけることもあつたのである。日本へ来て四ヶ月ばかりの時、武装もせずに散歩に出て、暴漢に襲われたのであつて、ハリスは、「私は彼に二度と武器をもたずに外出するなど言いつけた。」と記している。(ibid., P. 293. 一八五六年十二月二十三日条)さて次に彼の最後について少しく述べてみようと思う。

日普通商条約締結の交渉は、五ヶ月にわたつて行われた。即ち一八六〇年九月(万延元年七月)に交渉が開始され、六年一月廿四日(万延元年十二月十四日)に条約が締結されたのである。従つてヒュースケンは、この頃は殆んどプロシヤ使節の宿舎である赤羽根接遇所に通つていたのである。そして条約締結の直前一月十五日に暗殺されたのである。殺される直前まで殆んど毎日彼は、通訳森山多吉郎と日普条約のオランダ文を校訂していたようである。殺される前日も、ヒュースケンはハリスやオールコック其他プロシヤ使節団の人々と、クリスマス飾り付のある赤羽根接遇所で、楽しい昼食を共にし、みな上気嫌で遠乗りをして、ヒュースケンは夜九時頃まで、接遇所にのこつて、英字新聞などを讀んで、プロシヤ使節団の人々に説明をしているのである。十五日は、プロシヤからの贈物を將軍に贈る日であつて、これを受取る使者が赤羽根に来て、同時に条約についての二・三の文句の変更などの交渉があつて、一日多忙であつたが、ヒュースケンは四時頃から騎馬で散歩して六時頃赤羽根に帰つてゐる。夕食にはオイレンブルグを中心として皆集會して会食し、ヒュースケンに対して、その責任を完遂してくれたこと、その厚い友情、江戸滞在を愉快にしてくれたこと

となどを厚く感謝しているのである。(Eulenburg, *ibid.*, S. 149~150, *Die Preuss. Expedition*, B. II, S. 146-7, 148-9. 参照)

十五日夜、ヒュースケンの負傷の報をうけて非常に驚愕したプロシヤ使節団は、すぐ医者のルシウス博士、オウガスト(オイレンブルグ)、リヒトホーフィン、ベルグ、ブランドが徒歩で、ハイネは馬でかけつけたのである。(Brandt, 33 *Yahre in Ost-Asien*, B. I, S. 130. 参照) ハイネは途中で徒歩の人々を追い越して、アメリカ公使館に行き、また引き返してルシウスを迎いに行つたようである。プロシヤ側の記録に、この時の状況を次のように記している。「ヒュースケンの部屋は明々とともされて、彼はおびたゞしい血潮の中に断末間の状態でよこたわつていた。彼の廻りには、召使と写真師のウイルソンが居り、二人の日本人医者が切傷を縫う用意をしていた。傷は臍の辺から腰までの下腹部を切つたものであつて、内臓が露出され腸が切断されていた。」(*Die Preuss. Expedition*, B. II, S. 149.) ルシウス博士は血潮の中で縫合せの手術を行い、友人達が提燈を持つてこれを照らし、ヒュースケンの冷たくなりつゝある手を温めた。手術は彼を苦しめたが意識は明白で、死ぬかどうかを尋ねるほどであつた。英国公使館からもシラール神父やマイブルク博士などがかけつけ、陰惨なる光景に驚いていた。手術が終つて服を脱がせようとした時に、左の腕と上体とに傷を受けていることが分つた。彼はワインを要求し火を暗くしてくれと言うので、温めたベットに静かに寝かした。二人の医者とシラール神父等がつき添つて、他の人々は一時宿舎に引き上げた。十二時頃ヒュースケンはワインを求めたが、急に最後がせまり、シラール神父から最後の祈りを受けて、静かに死んで行つたのである。ハリスはベットの側らで、はげしく泣き悲しんだのであつた。下腹部に受けた刀傷が致命的のものであつた。傷を受けてから少くとも三十分以内に手あてをしなければならぬのに、彼は一時間以上も路上に放置されていたので、出血多量が原因となつて死亡したのである。ハイ

ホ (W. Heine) はその著書 (Eine Weltreise um die nördliche Hemisphäre in Verbindung mit der Ostasiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861, B. II, S. 42~60.) の中に、「犠牲者」という一章を設けて、この事件を詳細に記述しているのである。ルシウスの検屍の結果によると、ヒュースケンは左右から同時に襲撃されたのであつて、右下腹部の傷は、すぐ前の近くから与えられたものである。ヒュースケンは騎馬であり、襲撃者は徒歩であることが、傷の様子から推測される。左側からの襲撃は失敗して腕の上部に傷を負わしている。恐らくヒュースケンは左側からの襲撃を知つて、右側に避けたものと思われる。検屍の結果を総合すると次の如くなる。

(1) ヒュースケン氏は一八六一年一月十五日午後八時四十五分頃負傷された。傷は五インチ半あり腹膜を切り、さらに小腸の四分の三を切断したものである。また左腕上部と左胸第九肋間にも傷を負うている。

(2) 右下腹部の第一の負傷が致命的のものであつた。

(3) ヒュースケン氏は負傷後三時間四十五分で死亡した。

(4) 死亡の直接の原因は、出血多量によるものである。ヒュースケン氏は負傷後医者の手当を受けずに一時間四十五分放置されたためである。

オイレンブルグの手紙にも、「私は昨夜殆んど眠れなかつた。今朝起るとすぐルシウスから傷の模様を聞いた。彼が言うには、見るとすぐ、その傷は内臓が切られているので助からないことが分つた。」と記している。(Ost-Asien, S. 151. 一八六一年一月十六日条)

ハリスはヒュースケンの死で全くうちのめされたようであつて、ヒュースケンは私にとつては、普通の息子ではない、一人息子以上の愛情を感じていると言つて泣き悲しみ、犯人の発見に二百五十両(五百ターレル)の賞金をかけたのであ

る。また「ハリス氏は非常に深い悲しみに包まれていた。この二人は五年間一緒に生活し、初めは二人きりであった。ハリスが言うには、二人の間には只の一度も気まずい思いをした事がなかつた。彼の死によつて生じた空虚は充し得ないものである。あわれな男は激しく泣いた。彼は江戸と日本とを出来るだけ早く去るためにあらゆる努力をするであらう。」とオクレンブルグは書いてゐる。(ibid., S. 151 一八六一年一月十六日条) この事件を知つて幕府からは外国奉行小栗豊後守が夜一時頃アメリカ公使館に出向いてゐる。ハイネはこの時に、通訳と話したことを次のように記している。

その通詞は立石斧次郎 (Tateish Onizhiro) とし、年は十七・八才でアメリカにも行き英語をよく話し、トミーという愛称で呼ばれてゐる。<sup>(2)</sup> 彼は言う。日本よりアメリカの方が、はるかに良い。武士から両刀をとることは出来ない、政府はこれを行うことが出来ないし、もし行えば暴動が起るであらう。どうすれば日本はよくなるかとの間に、彼は、「よい学校を造つて、良い事を国民に教えこみ、バイブルを読ませるほかない。」と答えてゐるのである。これらの問答は、他人々の注意を引いたとみえて、クライヘル (T. Kreyher) もその著書 (Die Preuss. Expedition nach Ostasien in den Jahren, 1859~1862, Reisebilder aus Japan, China und Siam, S. 163.) の中に言及してゐるのである。

ヒュースケンの葬式は、一月十八日に行われた。オイレンブルグ伯よりプロシヤ外務大臣への報告に、次の如くある。「本日ヒュースケンの葬式が行われた。諸外国の代表も総て参加し、音楽隊も葬式の列に加つた。この葬式が行われるアメリカ公使館に私が出向うとした時、ハリス氏よりの通知に接した。それは五人の日本側の代表が来て、使節団に対する襲撃の恐れがあるから、使節団の葬式参加を中止してもらい度いという申込みがあつたのである。日本側の勧告に従つた方がよいという意見もあつたが、自分は、ハリス氏との約束もあるし、實際危険が生じた場合は、日本政府が十分な処置を取るであらうとの意見もあつたので、葬式に参加すると告げた。我々は皆ピストルやサーベルで武装

した。我々が埋葬地に向つて出発した時、路上は好奇心に満ちた群衆で大変であつたが、幸に何事も起らなかつた。最後に閣下に一つの希望を申し述べる。私はヒュースケンに対して、江戸滞在中にその報酬を支払う考えであつたが、滞在が予想外に永びいたことと、また彼のこの度の遭難事件で、その支払いをすまず機会を失つたのである。私はたゞ彼を食事に招待したゞけである。彼には老年の母がある。私はヒュースケンへの報酬を、今となつては、せめてこの年老いた母に与えてやり度いと思う。アムステルダムに住むヒュースケン夫人に、二千グルデンほどの金を与えられんことを、御願する次第である。」このヒューケンの葬式に参加した政府側の五人の役人は、新見豊前守、村垣淡路守、小栗豊後守、高井丹波守、滝川播磨守であつたようである。(Heine, *ibid.*, B. II, S. 53.) かくてヒュースケンは光林寺に葬られたのである。(なお彼の葬式の詳細についてはハイネ、シュピース等の著書及びプロシヤ東アジヤ遠征記等に記述されている。)彼の墓石には十字架の下に次の如く記されている。

Sacred to the Memory of Hendryc Heusken, Interpreter to the American Legation in Japan, Born at Amsterdam, Died at Yedo, January 16, 1861.

さてヒュースケン事件直後、オールコック(英)、ハリス(米)、ベルクール(仏)、デ・ワイト(蘭)、ヒュースケンをハリスに推薦した人と同名である。或は同一人で当時ニューヨークのオランダ領事をしていたかと思われる。)等が英国公使館である東禅寺に集合して、数時間にわたつて、その対策を協議した結果、英、仏、蘭の三公使は、横浜、江戸に於いて、すでに数回の殺傷事件が起つており、幕府に対して度々外人保護を要求し、加害者の処分を嚴重に申し出ているが、殆んど補縛されない状態であつて、幕府には全く外人保護の誠意がないと見るよりほかはない。我々は横浜に退去して海兵隊の力によつて自衛権を發動すると主張した。ハリスはこの意見に反対であつて、何等の危険も認めず退去する必要もない

と主張して、激論をかわしたのである。オイレンブルグは近く行われる条約締結まで、江戸を退去することが出来ないで、この間の調訂を試みたようであるが、結局英、仏、蘭の三公使は江戸を退去することゝなつたのである。(Eulenburg, *ibid.*, S. 154. 一八六一年一月一九日条、福地源一郎、懷往事談六一―二頁参照) ハリスはその後幕府と交渉して、幕府からヒュースケンの母に慰藉料及び扶助料として一万ドル(慰藉料四千ドル、扶助料六千ドル)を支払うことゝなり、また三公使も後に、ハリスの斡施で、形式的に將軍より三公使の帰還を懇請することゝして江戸に帰つて、この事件は落着いたのである。なおヒュースケンの死後、ハリスの通訳となつた人は、オランダ生れのポートマン(A. L. C. Portman)であつた。この人はペリーの日本遠征の際の通訳であり、最初の日本使節のワシントン訪問(一八六〇年五月)の時にも大いに尽力した人である。(The Complete Journal of T. Harris, P. 396, N. 440.)

ヒュースケンの死は、ハリスばかりでなくプロシヤ使節団の人々にも、大なる打撃を与えたのであつた。オイレンブルグもその手紙の中で、切々とそれを家族に書いている。「君達の知らない人々(ハリス、ヒュースケン)のことを詳しく書いて、君達には興味が無いだろうが許してもらいたい。然し私達はこの人達と本当に親しくなつていて、私達の江戸に於ける生活が楽しかつたのは、すべてヒュースケンの思い出と結びついている。今後は悲しみの印象だけが残るであろう。江戸の土地には居たゝまれない気持ちである。……食事の時も晩にもヒュースケンは我々の所に居なくなつてしまつたのだ。フランス人は食卓の老友が死ぬと、席をつめてもうその事は氣にとめないと言う。我々はそうは出来ないだろう。我々はあわれな若者を誠実な追憶の中に持ちつゞけるであろう。オランダには彼の年老いた母親が残つていて、彼はその一人息子で、力限り母を扶けていた。」(一八六一年一月十六日条) また、「今朝ハリスが来た。氣の毒な人よ! 彼は眠れないで、たよりないやつれた顔つきをして、ヒュースケンの名が出る度に、眼に涙をたゝえるのであつた。」(一

八六一年一月二十五日条)、さらにまた、「私がハリスに最後の別れを言うと、この老人は大声で泣きながら、私の頸に抱きついた。細い雨と雪が降っていたが、私は今一度ヒュースケンの墓に行つた。私達は皆非常に悲しい気持ちだつた。」(一八六一年一月二十七日条)とも記してゐるのである。(Eulenburg, *ibid.*, S. 151, 159, 160.)

ヒュースケン暗殺の原因については、当時在留の外人の間に種々噂があつたようである。彼は外人ばかりでなく、日本人側にも愛されていて、個人的に恨を受ける理由がなかつたからである。当時外人に対する襲撃が頻発して来たが、日本人でも外人と交渉のある人々に対する迫害が甚しくなり、ヒュースケン殺害後にも一商人が米国公使館の近くで襲撃されており、またプロシヤ使節団に出入りしていた漆器商も迫害を恐れて大阪に逃亡して、その店員も襲撃されて、遂に外人との商売を中止するという状態であつた。この頃我国側では外国奉行堀利熙の自殺事件が起つたのである。堀の自殺とヒュースケンの暗殺とは関係があるとの噂さが、一部の外人の間にあつたようである。一八六〇年十月の或る夜に、オイレンブルグを初めとしてプロシヤ使節団の人々がヒュースケンの案内で、火事見物に出かけたことがあつた。これについて堀は危険であるとして、ヒュースケンに嚴重に抗議したが、これに対してヒュースケンも、はげしい反駁の返事を書いていたのであつて、二人は相當に憎み合つていたのではないかというのである。然しプロシヤ側の記録は大略次のように記している。火事のあつたのは十月十一日で、自分達が堀を見たのは、十二月十三日であつて、この時堀、ヒュースケンの二人は何のわだかまりもなく、友好的な対度で話し合つていた。ヒュースケンは堀の度々の警告をきらつていたが、実際は彼を崇拜していたし、彼からも特別の待遇を受けていた。ヒュースケンが冗談まじりに通訳していた朗らかな会話の中には、全く怨恨などは認められなかつた。堀の死は十二月十三日から一月二日の間であり、一月十五日にはヒュースケンが殺されている。そのために堀の家臣が主君の復讐をしたという噂が広まつたのである。プロ

シャ使節団は一月二十九日に江戸を離れたが、其後の江戸の状態を絶えず気にしていたという。其後一年半過ぎて一八六二年の夏に、ハリスが米国への帰路ベルリンに立寄つた時に、これらの事が話題にのぼつた。ハリスは当時のこれらの噂は疑わしいものであろうとしたというのである。(Die Preuss. Expedition, B. II, 158-9. 参照)

さてヒュースケンの暗殺は、上にも述べたように、日本在留の外人達を極めて不安ならしめたのであつて、この暗殺後、横浜にシーボルト父子が到着したが、子アレキキンダーが一八六一年四月二十日に、母に宛てた手紙に次のようにある。「不幸なアメリカ秘書官ヒュースケンの暗殺は、当地の総ての人々を不安にしている。吾々がオランダ副領事ポレスブレークの所で朝食をとつている時、丁度またヒュースケンの母から手紙がついた。この時ポレスブレーク氏は次のような話しをした。私は最近、友人ヒュースケンが殺されてから二・三日後に、その母から手紙を受け取つたが、それには、『尊敬する君よ、私の息子が殺されたならば、貴君は彼を全く失つたという事を、この老母に隠さずに知らせ下さい。』とあつた。彼の母がこの事件を予知したということは、誠に不思議なことである。——」(Ph. Fr. von Siebold's Letzte Reise nach Japan, S. 84.) 当時の日本に於ける不安な状況が、外国にもかなり知られて、日本に血縁者や知人を送つていた人々の不安がよく示されているのである。ヒュースケンの生涯を知るには極めて不十分であるが、その大略と最後とを記して、本稿を終ることとする。

註(1) 東大史料編纂所小西四郎教授によれば同日記は米国カリフォルニア大学に保存されていると言う。金井圓氏の言によると近く  
公刊されるとの事である。

註(2) 金井圓氏「トミー」という名の日本人」(国際文化三十七年十月、同十一月号) 参照。斧次郎はこの事件当時ハリス付の通訳をつとめていたようである。(横井半三郎著、一亭二碑) 参照。